

平成 25 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2013年4月～2014年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表  
します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満  
たないもの、報告書が未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧告させていた  
だきますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 五個荘中学校

種別  保育園・幼稚園  小学校  小中一貫教育  
 中学校  高等学校  中等教育学校  
 教員養成  技術/職業教育  
 その他 ( )

住所 〒529-2451

E-mail : <gokachu@higashiomi.ed.jp>

Website : http://www2.higashiomi.ed.jp/gokachu/

児童生徒数：男子 205名 女子 213名 合計 418名  
 児童・生徒の年齢 12歳～15歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ( ボランティア活動 )

4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

※当報告書についてはユネスコスクールホームページに掲載するため、活動内容につ

いては、添付資料ではなく本報告書にご記入願います。

## いつまでも応援します五個荘中東北支援プロジェクト

東近江市立五個荘中学校  
東北支援プロジェクト実行委員会

### 1. 活動の動機と経緯

本校生徒会では「東日本大震災」直後に、『救援募金』を集めて被災地へ送った。募金だけでなく、こころを伝えようと検討を重ね、折った小さな鶴を瓶の中につるして飾る『瓶鶴(びんづる)』を全校生徒が分担して作り、被災した中学校へ送ることを考案。全校生徒が1万羽近い鶴を折り、『瓶鶴』にメッセージも添えて東北三県の67校にその年の秋に送った。(資料1)

多くの学校から礼状や写真、DVD等が返ってきた。生徒会執行部で返事を分担し、再度送り、生徒会同士の絆が生まれ、育っていった。送られてきたDVDや新聞記事を使って、全校各クラスで防災学習や道徳の授業をおこなった。

二年目の昨年度も生徒会執行部のメンバーは代替わりしたが、生徒の「支援を続けたい」との気持ちを大切に、生徒会執行部は学級で作るメッセージボードの取り組みを企画し、全校各クラスで作成したメッセージボードを被災地中学校32校に送り交流を続けた。(資料2)

三年目の今年、被災地もそれなりの落ち着きを取り戻している頃で、中学生が直接、現地に赴き、中学生同士の交流が深められないかと考えた。生徒との話し合いの中で「復興をこの目で確かめたい」「支援がどう受け止められているのか知りたい」との声が上がった。そこで、

- ・一昨年、昨年と東北支援の取り組みをした。今年度、いつまでも応援しますとの思いを東北に届ける。
- ・応援メッセージに対して被災された中学校はそれどころでないのに丁寧な返信をもらったお礼を直接言う。
- ・一昨年、昨年の生徒会の取り組みが現地の人にどれだけ届いたかを知る。
- ・まだ、人手を必要としている所に行って、復興ボランティアに参加する。
- ・被災と復興の様子を見、ボランティアを体験して、肌で感じた、防災と復興の何が大切で何が必要かを校内外の人々に伝える。

の目的を持った、生徒、生徒会執行部、教師、保護者代表からなる「五個荘中いつまでも応援します東北支援プロジェクト実行委員会」を立ち上げた。

### 2. 具体的な活動内容

訪問校へ手渡す、メッセージや記念品は生徒会組織を発動させ、全校生徒の手による取り組みとし、「手作り一日一語カレンダー」と「折り鶴5,000羽を束ねた応援メッセージ」を作成した。(資料3) また実行委員会中心に、校内や街頭、駅前で募金活動もおこなった。(資料4)

直接の東北へ赴いた者は生徒会執行部全員(28人)と一般公募で選ばれた10名。一行は平成25年8月6日早朝に五個荘を発ち、13時間貸切バスに揺られて岩手県釜石市に到着した。翌7日、早朝より仮設住宅を訪ね、被災現場に赴き、直接被災された自治会長さんから津波が襲った状況やその後の生活、復興などの話をうかがった。次に2年間交流してきた学校の一つ釜石市立唐丹中学校を訪ね、質問応答の他、互いの学校紹介、歌やダンス、記念写真撮影と直に交流を深めることができた。午後には釜石市で唯一残った海岸(ここもかなり破壊されている)の整備ボランティア事業「B1プロジェクト」のお手伝いをさせてもらった。(資料5)

### 3. 活動のポイント

- ・東北大震災当初からずっと支援を続けている。一環の事業

- ・生徒の手により、被災地の中学校に思いを届けることができた。
- ・被災地の現状と復興の様子を実際に見ることができた。
- ・被災地の中学生と直接交流がはかれた。
- ・被災地中学生の気持ちを垣間見ることができた。
- ・被災地ボランティアが体験できた。
- ・東北で見たもの、感じたこと、思ったことを全校生徒と地域の人に発信できた。

#### 4. 活動の成果、反省点

被災地のみなさんと唐丹中学校の生徒のみなさんには「いつまでも応援し続けます」と約束し、帰路についた。参加した生徒は強行スケジュールにもかかわらず、一人も健康を損なうことなく元気に帰校した。現地でも多くの現実に圧倒され、感じ、考えることができた。「これから、我々はなにをすべきか」の答えを求めてさらに考えることになると思われる。

さらに委員会メンバーは見てきたことと経験を他の生徒や地域の人々に発信する使命を持っている。9月26日、東北支援プロジェクト実行委員会は文化祭の中で全校生徒に向けて、この夏の活動と見てきた現実、そして感じたことを報告・発表した。(資料6)

11月4日、地域で開催された青少年育成大会で、地域のみなさんに向けて、この夏の東北の現状と現実、中学生が考えることを報告・発表した。(資料7) 現実に圧倒され、心震えたことを、全校のみなさんや地域の方々にお伝えした。どこまで伝えられたかわからないが、伝えきれなかった部分は今後の活動につなげていきたい。

#### 5. 今後の活動

被災地のみなさんと唐丹中学校の生徒のみなさんには「いつまでも応援し続けます」と約束し、帰路についた。参加した生徒は現地でも多くの現実に圧倒され、感じ、考えた。全校生徒や地域の方々に文化祭や地域行事などで報告・発表し、心の支援の輪を広げる事ができた。

プロジェクトの中心になっているのは生徒会執行部のメンバーである。生徒会・学校の伝統として、継続活動として東北被災地との交流と支援を続ける所存である。

#### ※活動中での、子どもたちの声や感想

- ・瓦礫の山を目の当たりにして言葉を失いました。
- ・被災地はまだまだ辛いことばかりなのに、お会いした方は周りを元気づけよう！町を取り戻そうと一生懸命頑張っておられました。私もそれに負けないようしっかりと生きていきたいと思いました。自分のふる里をもっと好きになろうと思いました。
- ・被災された方のお話を直接聞けて、今なお残る津波の傷跡に胸が痛みました。
- ・交流で一番してほしいことは「震災のことをいつまでも忘れないで欲しい」と言われました。私たちは学校の代表、地域の代表として行ってきたので、それを一生懸命伝えようと思います。
- ・帰り際、仮設住宅の前からひとり手を振ってくれた唐丹中の方の笑顔が忘れられません。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（）